

蘇我氏の興亡跡、明日香路探訪

1月27日(火)に23名の方の参加を得て明日香を歩いた。非常に寒い日ではあったが、幸い雨は降らなかった。

まずは、橿原神宮前駅から1区間バスに乗り推古天皇が即位した豊浦宮跡に建つ向原寺(豊浦寺)に向かう。寺の前の立て札にある廃仏派の物部尾輿が仏像を難波の堀江に投げ込んだが、後に拾い上げられて信濃の善光寺に奉られたいきさつを古川さんより説明してもらった。

次に甘樫丘に登った。ここは360度展望がきいて眺めがすばらしい。たくさんの方が熱心に絵を描いておられた。



北を見れば大和三山から生駒山、遠くには比叡山も見えた。西には二上山から葛城、金剛の山々、東にはひっそりと明日香の里。ここで蘇我氏の発祥の地や大王家との関係を系譜を元に説明した。馬子は大王家をも凌ぐ勢力を持ち明日香に君臨した。その後、乙巳の変により蘇我宗家は滅びるが傍系から蘇我の血は天皇家にも藤原氏にも色濃く残ったと説明する。

甘樫丘からの帰路に故犬養孝先生揮毫の万葉歌碑がある。「采女の袖吹き返す明日香風 都を遠みいたずらに吹く」有名な信貴皇子の御製である。持統天皇の時に都が明日香から藤原京に遷都されるが、明日香古京をしのんで歌った歌である。

万葉集は天皇や貴族の歌ばかりではない。名もない庶民や防人の歌なども数多く載せられている。桜井市金屋は古代には交通の要衝であり、海石榴市では連日市が開かれていた。

夜は若い男女の結婚相手を求める歌垣が行われていた。今で言う合コンであろうか。ここで歌われていた歌が万葉集に残っている。庶民は漢字を知らなかったと思われるので歌謡的に歌われていたものを万葉集の選者が収録したものであろう。「紫は灰さすものぞ 海石榴市の八十のちまたに あえる児やたれ」紫は染料の紫草で女性をさす。灰は椿の灰で触媒として使われ美しく発色させる。灰は男を指す。男が女に呼びかけ名前を尋ねている歌である。この歌の歌碑は山之辺の道にあり、今東光和尚の揮毫になるものである。これに対する女歌は「たらちねの母が呼ぶ名を 申さめど 路ゆく人を 誰と知りてか」である。古代には名前を告げることは結婚を承諾することであった。女は雑踏の中でお会いしたばかりの見知らぬ人に簡単には教えられませんわとやんわりと断っているのである。万葉集は歌うものであるとの犬養先生の教えの元、全員でこの万葉歌を歌った。



明日香に降り、飛鳥寺に詣でた。ここは馬子が建立した日本最初の寺である。

飛鳥大仏見学後昼食をとる。寺の住職さんの書いた立て札があり、飛鳥寺から南方を見た風景が古代の百済の都扶余の景色とよく似ていると書かれている。

筆者も韓国の扶余にいったことがあるが、小高い丘の点在する明日香の風景は、確かに扶余に似ていると思った。飛鳥に住んだ渡来人達も深い郷愁をそそられたのであろう。

その後県立万葉文化館へ移り、古代の富木銭を作った工房跡や万葉集にまつわる様々な展示を見て回り、文化館前にて解散となった。寒い中たくさんの方の参加をいただきありがとうございました。

(文責 杉本)